

である。

縦隊は何故に殆んど百米毎の停止を要せしや。戦術上か、あらず、實は寧ろ笑ふべき出来事の原因であつた。二輛の野戦砲厨車が橋梁を渡るや彼岸の山腹で顛倒し行軍路を閉塞した、爲めに之を迂回するを要した、然るに地形嶮峻で意の如くならなかつた、之が爲多くの部隊は増駕して車輛を通過せしむる爲、其全車輛を二分し其一半を殘置して脱駕し、他の車輛に増駕して行進した。停止の頻繁なりし理由は即ち是であつた。

擲弾兵聯隊は、爲めに前方部隊との連絡を失し、副官は前方に走つて搜索に努めたが、容易に發見するを得ず。聯隊長は不安心ながら北方に曲れる野道を選び、萬一に備ふる爲警戒部署を以て進んだ。此場合に於て吾人の胸に潜む不言、不語の希願がある、即ち「此の如き暗夜と濃霧との中で不案内の地に敵と衝突しない様に」といふことである。故に將兵共に既に綿の如く疲勞し切つて居たに拘はらず、精神は異様に緊張し、危険に備へんとする本能的防禦の思念が活躍した。彼等の眼は夜暗を透視するに至り、其の聴覺は細微なる音響をも失はせなかつた。然し幸にして擲弾兵第五聯隊はディングラウケン東方の街道で師團の縦隊に追及し得た。此再會の瞬間に於て戰士の精神は俄然として弛緩した、即ち安心である。一時間半を通じて一回の休憩もなく行軍を

遂行したことは、兵等の寧ろ喜んだ所であるが、是に至つて忽ち疲勞を感じ一言も口にする者すらなきに至つた。

暫くして縦隊の傍を疾驅する傳令があつた。彼は先頭より後尾に、更に後尾より先頭に向つて馬を驅りつつある。第七中隊長を認めるや、曰く

師團は街路の西側に休息し街路を開放すべし

兵等は或は畑中に臥し又は街路に沿へる溝内に横はつた。凜冽肌を切るが如き寒風が襲つて來た。數時間前燃ゆるが如き炎熱は今や氷の如く冷え渡つた。之は東普に於ける夏季の特徴である。第七中隊第一小隊を指揮したる少尉は兵と共に溝内に横はつた。一時間餘も過ぎたる頃、少尉は突然何物にか其の咽喉を絞めらるる如く感じ、驚いて起き上がった。然るに自己の前には一團の砲兵が通りつつあるのであつた。惟ふに砲車が溝に近く通つた爲、其の車輪が少尉の鐵兜の尖端に觸れ其の鎖が少尉の咽喉を壓迫したのであらう。

少尉は眼を擦りながら周囲を見廻はした。砲兵は前進しつつある。是れ果して何を意味するかを考へた。士官學校の戦術教程には、後方より砲兵が前進し來るは是れ戦團の開始せらるるを意味すと教へられてゐる。然らば戦團は將に開始せられんとするや或は明日となるや等を臆ろげに

考へつつあるとき、突如として彼の足下より一人の兵が起き上つた。少尉は窒息するが如く驚いた。然し此兵は寒氣に堪へざる様子で幾度となく兩腕を高く振り上げ外套を深く纏ひ再び横臥して仕舞つた。

兵等の間を縫うて前方に歩みつつあつた少尉は、不圖前方に人馬の聲を聞いた。見れば先頭の中隊は既に銃を執つて居る。待つ間もなく第七中隊長の號令は高く聞えた。然るに、中隊は一人として中隊長の命に従ふ者がない。一人として進發の準備を爲す者もない。彼等は尙ほ熟睡より覺めなかつたのである。中隊長の怒號によつて、兵等は始めて生氣を吹き返した様に覺めた。然し其動作は極めて緩慢で、先づ外套を巻き背囊を負ひ隊長の號令をも待たず銃を解いた。拂曉の前進光景夫れは壯烈な感じ崇高なる姿態を連想するが、事實は寧ろ反對であつた。諸列交錯して隨所に集團を爲せる有様であり、或は銃を肩にかけ、或は肩に擔ひ、或は外套の釦をかけざるもの、或は卷いて肩にかけたもの、甚しきは背囊を露營地に置き忘れたものもある。唯將校を見るとき始めて部隊内に特殊なもの存在を感ずる。

評 夜間の宿營状態、出發の實情等軍紀嚴肅、訓練精到なるべき獨軍就中擲彈兵隊に於てすら斯の如き有様である。之れは決して他人の事と思はず、吾々も亦秋季演習等の實狀に鑑み省

みる所あるべきである。

ギルネン村に到着して休憩した時、野戰庖厨車をして珈琲を支給せしめられた。支給を受けんとするときの兵等の顔容は、さながら蒼白死人の如く見えた。然し支給を受けた後の彼等は別人の如き感があつた。珈琲の最初の一口が如何に美味であつたか、贅澤者の山海の珍味にも比すべきである。熱き飲料は宛然新鮮なる血液の如く體內を廻つて五臟六腑に浸み渡つた。彼等は恰も再生の力を與へられ、一段の勇氣を加へられたのである。忽ちにして沈黙の彼等が活潑なる會話を始めたではないか。

時に恰も北方に當つて遠く砲聲が聞えた、此瞬時に沈黙が全隊を支配した。異様の感動に打たれたのである。縦隊の行進を始めても彼等の精神は尙ほ常態に復せぬ。敢て恐怖と謂ふべき程でもないが、何となく異様な或る物は彼等の胸を重からしめ、其呼吸を困難ならしむる。吾人は人類である、生さんと欲するの本能を持つ。

評 之も偽らざる告白である。疲労し空腹の時、一杯のコーヒー夫れが山海の珍味以上に彼等を欣ばせたことは我々も度々經驗済である。又初陣に於て一度銃砲聲を聞くや、精神の興奮乃至恐怖は其肉體を支配する。唯多くの經驗を重ねた者、修養を積んだ者乃至先天的の素質

を有する者は此の外來の支配力を排除して従容たり得るものである。幹部たる者は此心懸けが何より大切であり、斯かる場合に於ける自若たる態度は、以て衆望を獲得し信頼を享受し戦力を最高度に向し得べき最大の素因となるものである。

三 戦闘開始

歩兵第三十六師團はギルネン附近に展開命令を受けた。此時三十二軒を行進し心身共に疲勞して居た擲弾兵第五聯隊とダンチヒ歩兵第二百二十八聯隊とは、第七十一旅團を成形したる兩分子である。此旅團は、シユウイーグセルン！グリュンワイチエンの線に前進すべき命令に接した。當時敵軍の左翼はグリュンワイチエン附近に在るものと判断したのであるから、包圍の好機會であつた。然るに「露軍は總退却を行ふものの如し、軍は敵を追撃す、追撃準備を爲せ」との命令が突如として下つた。

當時師團騎兵聯隊はロミンテ河谷に進みワルケイメン附近には敵影なきを報告したので、擲弾兵聯隊は直に該部落を通過した。見渡す限り人影もなく宛然死界の如く冷氣身に迫つて堪へ難き感じがした。併し間もなく太陽を仰ぎ得たとき將兵の歡喜はまた一入であつた。

第五聯隊は旅團の右翼に展開しつあるとき比隣第二百二十八聯隊は敏捷にも早く此の線上に展開し、第二大隊は爲めに押し除けられた。時に突如としてシユムルケンの民家附近から銃聲が聞えた。是に於て我が第三大隊も之に應戦した。而して其二箇中隊の如きは敢て大隊長の命令を待つことなく自から展開し、兵等は練兵場に於て習得した様に射撃を始めた。

評 讀み來れば平凡の様であるが、參考の資たるに足る。朝始めて太陽の顔を拜するときの心地よさは誰しも分り切つたことだと言ふであらう。然し戦闘開始直前の緊張せる而かも困苦を嘗めたる時、夜暗の不愉快さから朝日を仰ぐの愉快さは又言ひ知れぬものがある。

西曆一八〇五年奈翁がアウステルリッツに露埃軍を撃滅する直前、旭日東天に昇つたとき兵士の歡喜は非常で、戦勝を確信して出撃した。爾後「アウステルリッツの太陽」なる平凡なる言葉が佛軍の志氣を支配したと謂ふことである。又最後の記事の如く大隊長の命令も下らぬ内に展開をしたり、又、命令なくして妄りに射撃を開始したりすることは、勿論禁ぜられてあり、平時は非常に喧しく教育されてゐるが、いざ實弾が飛來すると其觀念が破壊され易きは各戦闘に於て殆んど常に犯されつゝある所である。此の件に就ては平素から餘程嚴格に精神的に教育して置くことが必要であるばかりでなく、實戦に臨んでは指揮官特に中隊長や小

隊長は、戦機將に迫らんとする前に、嚴重に又懇切に事前の注意を與へ、以て彼等に平素の教育を想起せしめる様にすることも必要である。然し指揮官にもそんな餘裕がなくなり易いことは記事の通りである。故に平素から自己の修養が肝要となる譯である。

我軍は午前八時三十分頃シユウエンタイシユケ河を渡り露の前進部隊を撃退し、捕虜を獲たが、我が軍の損害も少くなかつた。愈、右の河谷を進出するや前方よりも右方よりも猛烈なる銃火を蒙り、恰も地獄に這入つた様な氣がした。然し敵影は之を見出し得ぬ。我が戦線は忽ち稀薄となり死屍は列をなして横はり、到る處に苦痛を訴ふる者、救助を求める者の聲を耳にするも、之を救ひ、之を助くるものはない。然るに我が砲兵は尙ほ未だ一發の砲弾をも敵に送らぬ。請求は櫛の齒の如く後方に飛んだ、砲撃開始の要を叫ぶの聲である。此の儘では全滅すると訴へるのであつた。待ちに待ちたる砲兵が漸く附近の高地に放列を布くや、先づ敵から榴弾を見舞はれ、我が砲車の中間に爆發した。彈藥運搬の段列は木の葉の如く四散した。馬匹は離れて狂奔した。我が彈藥は空しく空中に飛散した。畫家が之を見たならば眞に戦闘の好畫題を得たであらう、然し歩兵が之を見た感じは全く異なるものがある。

「手は地上に痙攣を起し、體は平蜘蛛の如く低く伏せ、眼を上げて見るを得ず、銃の使用も出來

ない。彼等の欲するものは唯だ掩蔽物のみである。此の如き狂暴なる砲火に對し何事を爲し得べき」。之れが各人の姿態であり又頭腦を支配せる思念であつた。教範には「掩蔽物を求めんよりは先づ進んで射界に入れ」と反復教示せられてある、然し此の敵前に於ては一の内的強制があつて此の教示に従はしめぬのである。

擲彈兵聯隊の比隣部隊たる歩兵第二百二十八聯隊も略、同様の状態で、敵の猛烈なる砲火の爲め其兵力は忽ちにして盡きんとするが如くに見えた。又第十七軍團の他の一師團即ち歩兵第三十五師團は特に大なる困難に遭遇することなく散兵を進めつゝあるを見たときは、各指揮官の意氣頓に揚り、勝利の望を懷き得るに至つた。第一軍團の戦況は二十日午前中順調に進捗したが、其後敵は有力なる増援を得たるものの如く、戦況は漸次苦戦を加へた。而して午後露軍の逆襲を受くるに及び此軍團も亦危機に瀕するに至つた。

第一、第十七軍團が激戦奮闘しつゝあるの際、南方では尙ほ行軍中にある豫備第一軍團があつた。該軍團は天候と悪路との困難を排しつゝ急進した。戰場に近づくに従ひ股々たる砲聲はワルケルケイメン方向から響き渡つて聞える。軍團の右側には騎兵の報告に依つて敵無しと信じた。軍團長ベローは一意砲聲に向ひ東北方に急進した。然るに軍司令官からは軍團の右側ロミンテ森

林の南方に露の二箇軍團(事實は其の半數位)開進しありとの警告的通報を受取つた。然しペロイ大將は之に耳を藉さず依然東北方に進軍した。軍司令部から重ねて嚴に警告を發し豫備第一軍團の任務は軍の側面掩護に在る、軍團は決して之を忘れてはならぬと注意した。是に於てペロイ大將も行軍停止を決するに至つた。然し大將の耳は尙ほ常に北方の戦況にのみ傾くを禁じ得なかつたが、愈々露軍が自己の側面に現出するに及んで、大將の關心を右方に注がしめたのであつた。

評 戦闘間敵方よりのみ砲撃を受け味方の砲彈が敵の頭上に爆裂することなきとき心細き事限りなしである。之れは單に物質的損害の量でなく、精神的に甚大なる影響を及ぼすものである。本記事も砲兵の參戰遅かりし爲、歩兵の失望落膽乃至不平、憤怒の狀は思ひやられる。此件も砲兵たるものは心得て居らねばならぬことである。又、其時に於ける兵等の恐怖状態、掩護物を何よりも第一に求めることも有り勝ちで、人の心理は自然に斯く誘はるゝものである。溺るゝ者は藁をもつかむと同様に、撃たれんとするものは一塊の土と雖之に據らんとするものである。實戦者が能く言ふ様に、不意に敵から射撃を受けたときなどは、皆期せずして小さき地物に蝟集し前後、左右に重疊して却つ目標となり損害を増すのも氣つかずして互に密著し合ふものである。故に指揮官は沈著して之を制し得るの餘裕が欲しい。(未完)

四 擲彈兵第五聯隊の戦闘

第二大隊はグンペンネン戦闘の緒戦に於て聯隊豫備となつた。之を最も遺憾に感じたのは第七中隊長であつた。彼は公然其遺憾の意を表はした。然し兵等は別に大なる不平を感じた様には見えぬ。午前九時頃迄、シユムルゲン東方の農場に沿ふ馬鈴薯畠に休憩した。初期には彼等も立ちて戰場を遠望しつつあつたが、最初の榴彈に見舞はれた後は唯掩蔽物にかくれて眼を出す者もなくなつた。間もなく兵の多くは無頓著となり、漸次猛烈さを加ふる戦闘の喧騒爆音等も意に介せざるものの如く、多數の者は睡眠に陥つた。蓋し夜間の過勞が原因である。而して目覺めある者は携帶品の整理をなし。手紙を読むもの、骨牌を弄ぶもの、背囊を敷臺にして手紙を書くもの、足の手入をなすもの等々、至極平和氣分である。唯將校のみは不斷の注意を以て周圍の事態が如何に推移しつつあるかの觀察を怠らぬ。賢明なる中隊長は既に一時間以上前に部下を後方に送り野戦庖厨車及彈藥車を招致せしめた。蓋し何事を爲すにも先づ胃と武器とを戦闘開始前に満足の状態に置くことが必要であるからである。

評 戦闘開始前に於ける實狀が描かれてある。中隊長が其所屬大隊を豫備隊にされたことに不

平を洩らしたことは他の場合に於てもよくあることで、我が國軍に於ても其例は少くない。誰しもいやである。故に統帥者としては部下に戦功を建てる機会を興ふるに公平でなければならぬ。之は大切な注意である。

戦闘開始直前に於て大部分睡眠する如き一寸考へると變な様であるが、過勞の結果は睡眠を誘ふものであつて、過勞した者は眼中敵も味方もなく、唯睡眠のみであり、砲烟彈雨の中でも従容として恰も勇士其ものの如く眠るのである。

又初陣の場合、始めて戦闘に參與したとき、縦ひ豫備隊であつても、此記事の様に手紙を書いたり、かるたを弄んだりするのは、筆者の淺見では一寸普通の状態でない。過勞で覺えず眠るか、左もなくば緊張と多少の恐怖とが加はつて、戦況の推移如何を案じ一寸手がつかぬものであらう。勿論、度々戦闘に参加した後は別問題である。

恰も此時、街上を疾驅し來れる二箇の車輛があり、砂塵を卷いて田野を越え來れる騎兵の一團があつた。此等は中隊に近き高地に停止した。之は我々の師團長即ち歩兵第三十六師團長フオン・ハイネチウス中將と其幕僚とであつた。而して此高地は屢々榴彈に見舞はれたる危険の地點であるが、師團長は鐵の如く鞍上に坐して動かぬ。之を望見せる將兵は心強く感じた。時に第七中

隊の一小隊長が、中隊の爲彈藥及糧食を運ぶべく部下の兵を後方に遣した。各小隊より選抜した優良兵一分隊は薄き散兵線をなして後退し、中隊を距ること百米位の處まで來たとき、高地から騎兵の傳令が走つて來た。而して少尉に言つて曰く、

閣下は本分隊の指揮官に面會し度いと言はれました

そこで少尉は中將の許に赴いた。中將曰く「貴官の指揮する部隊は他に悪い印象を興へると思ふが如何」と。答に曰く「本分隊は糧食及彈藥を受領せんが爲に後退するを要する譯であります」。中將曰く「然し之を見る者は恐らく分隊の退却と誤信するであらう、貴官として須く他の方法を講ぜなければならぬ。」と。

評 師團長の注意は、精神に於て味ふべきものがある。事實司令部の者が斯く感じたのであるから。戰場に於ける他の者に對し志氣上に影響を及ぼす如き動作は注意せねばならぬ。

少尉が中隊に復歸したとき中隊長は各小隊長を高地上に集め中隊の攻撃法を指示した。中隊長の命令を下す際其口唇が微に震うてゐた、其聲も亦戰のいて居た。然し之は臆病の爲ではない緊張そのものである。次で將校が先頭に立つて進み始めた。頭上に砲彈が空氣を切つて飛ぶ音がする。其都度頭を下げる者は誰ぞ、と言ふも寧ろ下げざる者なしと云ふも過言でない。斯く前進中

屢、轟然たる音響を以て爆裂する砲彈に襲はれつつ、シユウエンテイシユケ河の低地に到る。此處に溪流あり灌木あり、ふと見れば此地に人の潜むを見る。少尉は二人の負傷兵の外に多數の非負傷者が居るのを發見した。彼等は何の爲めに此處に潜めりや。少尉は彼等に問ふも彼等は答へぬ。唯狼狽するのみである。依つて少尉は彼等を集合し少尉の小隊に合せしめ一人の下士官をして彼等を監視せしめた。

評 猥りに戦線を離るることは、勿論嚴禁されてある、にも拘はらず戦場の各所には此記事の如き事實を發見する。負傷者でも出來ると、之が扶助者として多數の者が附き添はんとする。負傷者に同情の餘りと言ふこともあらう。勿論生死を共にする戦友であるから。然し心理は更に他の重要な内的強制に支配され、戦線を去りて生命の安全を得んとするの念願に捉へらるるに因る。幹部が特に監視を嚴ならしむるを要する所以である。

更に進むに従つて開豁地に出た。空を切る砲彈の音も益々激しくなつた。少尉は覺えず頓首すること一再ならず。後を見れば部下の兵は續いて居る、赤面を禁じ得なかつた。一般に戦々兢兢たりである。少尉に従ふ者約二十名であつた。前面よりは機關銃の射撃が頻りに起る。少尉は躍進を行ひつつ一進一止して進んだ。今や吾等は夜來の疲勞を完全に忘却し去つた模様で、唯夢中

で進み、而して掩護物の探求に多忙である。少尉は不圖後ろを見ると、灌木林中からまだ出て來ない者がある。少尉は其名を呼んだが、依然として潜んで居る。少尉は再び自身、後退して其一人の頸を掴み前方に突き飛ばした。斯くて小隊の兵等は平蜘蛛の如く地上に伏せ、叫喚、痛苦の聲も起つた。時に少尉の傍から不安に充ちたる聲が聞えた。

前進は到底駄目であります、もう戦死したものが五人もありません。

答に曰く「躍進」

身體は大地に密著して離れ難い。兵等は右足を曲げて地を蹴り、其勢で前方に躍進しようと思ふが難かし。

立て、進め、進め

進まんか生命を奈何せん、留まらんか命に背くを奈何せん、兵等は齒を喰ひしはつて立ち上からうとするも再び力なく地に平伏する。砲彈空を切ること愈々甚しく、前に進む者倒れ去るを見る。然し敵は何處に在りや、少尉は眼鏡を取つて物色するも唯閃々たる光を見得るのみ。偶々人影を認め、敵かと思れば味方であつた。不圖氣著けば此方を指して走り來る者がある。少尉は腕を上げて之に合圖をしたが彼は知らざるが如く去らんとする。少尉は更に聲をあげて叫んだ。然し彼

の耳は聾したか唯脱兎の如く走るのみである。僅かに三十歩の距離に於て再び呼び止めるも無効に終り、狂人の如く遂に消え去つて仕舞つた。少尉は注意して見ると此逃走兵は銃をも持たず劍をも帯びず帽をも失つて居る。然るに間もなく更に前方から同様の状態で狂的に走り去るものが多數ある。皆是れ逃走者であつたのである。少尉は奮起した。彼は雙手を擴げて大地に屹立した。恐るべき砲火も今や少尉に何等の感覺を與へぬ。

停れ

大喝一聲、先頭に走る者を停止せしめんとした。五十歩の距離で突如悲鳴をあげて顛倒するものがあつた。恐らく一弾彼を貫いたのであらう。而も尙ほ他の者は逃走し去らんとするのである。少尉の猛獸の如き咆哮も耳目を奪はれたる彼等には感ぜない。少尉は乃ち意を決して發砲した。實に彼は發砲したのである。軍律は之を命じてあるのである。若干の逃走者は之が爲めに倒れた。併し残餘は尙逃走を續けんとするのであつた。

評 砲彈の下、銃火の前、前進の難きは此の通りである。之を排除して強行し得るものは一に幹部の率先躬行、激勵、鞭撻である。

逃走者が盲目的となり、聾者となり、所謂夢中で疾驅するの有様は能く描かれてある。勿論

獨軍のみでなく、各國軍に其例を見る。我が軍には之れ無しと自負してはならぬ。吾人は其例を擧ぐるに忍びぬ。然し是れ決して等閑に附すべからざる事柄であることを強調する。

今や少尉に従ふ者十五人のみ。他は戦歿或は負傷した。彼等は散兵線に在つて困難、痛苦の一日を過ぎなければならなかつた。彼等は硝子の如く大きく兩眼を開いて前方を凝視した。太陽は高く燃えて居るが、遂に露軍の姿は之を認むるを得ず、日没に及んでも尙ほ露軍の砲撃は繼續され、之が爲、多數の將兵が此處に永眠せしめられた。兵等は其工具を以て小なる掩體を設け小なる坑壕を穿ちて之に身を潜めた。哀れ彼等は此際如何に其工具を愛用せしことよ。

此ワルテケトメンの戦場に於ける八月の一日が如何にして斯くは長きぞと歎ぜざるを得ぬ。而して日漸く暮れて、四境平靜に復りたる時、心身の疲勞は其極に達して何等考慮の餘力もなかつた。實に此一日を通じて驚くに堪へたるもの餘りに多かつた。平素習ひ得たるものよりも餘りに相違せる事實が多かつたのである。試みに問ふ、兵の名譽心と服従心とは如何、恐らく之れより更に強大なる力の存するものありや。敵影を認むるを得ず、何れに在りて抵抗するやも知るを得ずして、而かも敗戦するが如きことは信する能はざる所である。此等は總て吾人の未だ聞かざりし所であり又考へ得ざりし事實である。戦闘に生き残つた者の永く記憶から去る能はざる事

柄である。

評 平素は工具の如き寧ろ兵等の嫌忌する所であるかも知れぬ。然し實彈飛來の戰場では、其徒勞となると否とは問ふ所にあらず、有らゆる勞を惜まず暇あれば此工具を働かすのである。敵の位置を確認し得ずして徒らに損害を蒙ること程、馬鹿氣たことなく、又不安心なことはない。此不平の記事の心情も、左もあるべきことである。故に吾人は又逆に之を利用し、陰蔽接近、不意に彼等を見舞ふことの如何に効果があるかを想ふべきである。

シユウイグゼルとワルシユレーゲンとの間にある墓地の附近で午前十時頃極めて猛烈なる戦闘があつた。擲弾兵第五聯隊第十一中隊は其最後の全力を傾倒して辛うじて之を奪取した。然るに尙ほ前面の墓地外壁は敵が頑守して退らぬ。該中隊は更に之が奪取に努力するを要した。中隊長は最前線に立ちて指揮した。部下からは是れ以上の前進は不可能であると進言したが、耳を藉さず、號令に應じて銃を執る者は敵の狙撃を受け、一發又一發、中隊の兵員は残り少なくなつた。兵等は左右から中隊長に身體を掩蔽すべく進言した。大尉の周圍には銃丸雨の如くに集まり砂煙を立て危険限りなき状態であつた。然し大尉は自若として雙眼鏡を以て敵の所在を探がして居つた。偶、一彈は大尉の頭骨を貫通した。大尉が倒れるや直に曹長が走り寄つて之に繃帯を施さん

としたが、自身も亦敵彈に斃された。勇敢なる兵四人が身を挺して中隊長を墓地の石垣の後方に擔ひ去らんとして二人は腕を取り他の二人は脚を抱いた。突如機關銃の連射は其三人を斃した。他の一人は瀕死の重傷を受け後方に匍匐した。

第十一中隊長の戦死に際して吾人の眼前に現はるるものは義務觀念である。嚴格なる義務觀念は人間性の最深部に潜在せる一物を顯はすに至るものである。

午前の戦闘中、シユウイグゼルの部落で得たる俘虜が若干あつた。彼等の遁辭はかうである。「予は軍人ではない、唯露國砲兵の戦況を見物せる土民である。」之を聞くや、兵等は大に怒り即決制裁を加へんことを主張した。恐らく銃殺の宣告を與へられたかも知れぬ。暫時の後、又十二人の俘虜を獲た。然るに兵二十名が之を護送して來たとき、大隊長は其二名を監視者として残し、其他は怒罵を加へて戦線に復歸せしめた。俘虜等は何れも大地に跪坐して哀みを請ひ或る者は砂塵に汚れたる將校の長靴に接吻せるものもあつた。

日高きに従つて戦闘は益々險惡となり、隨所に散亂しつつ退却する者を見る。其多數は負傷兵であつたが、遂には全軍の退却を見るの已むなき状態に陥つた。小隊長より軍司令官に至るまで全力を擧げて退却を阻止するに努めた、が奈何んともする能はざる状態であつた。其内に軍旗が

失はれたと傳ふる者があつた。擲弾兵第五聯隊第三大隊長は一大事なりとして僅かな兵を引連れ
て挺進し軍旗は何處にありやと不安なる眼を以て戰場を搜索した。戰場所々に横はるものは累々
たる死屍と、負傷兵とのみ、軍旗の所在を知る者はない。大隊長は狂氣の如く更に進んで搜索し
た。時に一部隊の退却し來るに會つた。之は第十二中隊であつた。軍旗はそこに存在を認めた。
大隊長は突進して欣んだ。瞬時彼等は軍旗を圍んで佇立した。感激のシーンである。時に砲彈一
發、天地も震憾する如くに、第十二中隊の頭上に爆發した。兵等は四散して思慮を矢つた。「逃げ
ろ」と叫ぶのみであつた。大隊長は軍旗を高く掲げて怒號した、

軍旗を遺棄して顧みざる者は誰ぞ

遁走は忽ちに止んだ。身を翻して銃を執り我にかへつた。大隊長の「停れ」の聲は超人的であつ
た。

評 十二人の捕虜を二十人で護送し來るなど、怪しからんと思ふは當り前であり、大隊長が叱
責して戦線に歸したのも當然である。然し戦線を何等かの理由で安全地帯に逃れんとする心
理は一般に濃厚に持ち合はせて居る。従つて責任少きにつれて、此心理に支配されるもので
ある。

歩兵第七十一旅團長フォン・デウキッツ大佐は、擲弾兵第五聯隊長フォン・アイヘンドルフ大佐
と共にシュウイグゼルン村の出口に頑張り、退却し來る者を親ら集合し之を臨機小隊に編成し其
指揮官を定め、秩序の恢復するを待ち、再び前進の命を下した。

第十七軍團長フォン・マッケンゼン大將も亦ドルテイシケン東方高地の司令部を撤して幕僚
と共にロミンテ河の橋梁に急いだ。將軍は最も尊敬に値する軍人の典型であり、勇敢なる武人で
あることは、能く人の知る所である。此白髮の將軍も遂に黙視するを得ざるに至り、最後の努力
を爲すべき秋であると思つたのであらう。將軍の英姿現はるれば退却の如きも直に阻止せらるる
を常とすべきに、此瞬間に於ては將軍も亦單に一箇の人間に過ぎなかつた。第三十五師團の恐怖
は盲目的で奈何んともすることが出来なかつたのである。

併し戦闘は之で終つたのではなかつた。部隊は尙ほ戦線に在る。彼等の眼は敵を凝視しつつあ
る。午後二時突如、後方に遠雷の如き音が聞えた。友軍の重砲が遅蒔きながら其砲門を開いたの
である。散兵線上の兵等は此時に至り始めて呼吸を恢復した。然し戦況を挽回せんが爲めには、
勿論餘りに其參戦が遅きに過ぎた。但し重砲の參加に依り軍は少くも最悪の結果から救はれた。
遙かに後方から、恰も地震の如く狂暴的に唸りつつ空を切つて散兵の頭上を掠めて遠く彼方に飛

んで行くのは重砲弾であつた。然るに何事ぞ、散兵線近くに黒煙濛々として大なる土塊や、鐵片等が彼等の側方に落下し大地に深く突入した。露軍亦重砲を發射したのであらうか、否な是れ友軍の發射せる砲彈であつた。二發三發同様の落下彈が續けられつつある。嗟呼天命なる哉。散兵は右往左往、掩護物を求むるに多忙であり、殆んど自暴自棄の態である。偶、號令が下つた、然し隊は之を耳にするものもない。不圖見れば軍團豫備が新たに戦線に展開したのである。兵等は新軍隊の者に向つて暖れたる聲を以て彼等に前進するの不可能なるを忠告するものがある。然し彼等は之を耳にすることなく、青年少尉は斷乎として「躍進」を叫んだ。併し之は青年少尉の最後の號令となつた。一躍進、二躍進、彼等はばた／＼と斃れた。間もなく敵の逆襲が友軍の軍紀を征服し去つた。

(322)

評 聯隊長、旅團長が部隊の退却を阻止するに努め、果ては軍司令官までが、退きつつある波浪を喰ひ止めんとしたが及ばなかつた程、此日の第十七軍團は散々な目に逢つたのである。重砲の参加により其最悪の場合から救はれたのは不幸中の幸と謂ふべきも、他面から言へば其参加の遅かりし爲、斯の如き慘況に陥つたのである。友軍の砲火が屢、自軍の戦線に損害を與へることがあるのは、何れの戦闘に於てもよくある

ことである。此記事の場合も亦然りて、戦史に依ると砲兵は目標を誤まつた爲、友軍に彌が上に混亂を増さしめたと示されてある。將來目標の發見益、困難となるべきが故に、此種の誤が起り易い。注意すべきである。

日既に暮れて戦場は次第に静まつて來た。唯時々銃聲を耳にするのみであつた。夜中、此處彼處に身を起して起立する者がある。其起立者の周圍は死屍を以て埋まつて居る。然し彼等は餘りに關心を持たぬ。幾多の睡眠者が此中に交はつて居る。敵を前にし、死が目前に迫つて居るのに、彼等は銃を枕にして眠つて居る。

遙か後方に車輛の響が聞えた、野戰庖厨の到着である。突如とし到る處活氣を生じた。此瞬間に彼等は一切を忘却し去りたるものの如く、其背囊を開いて飯盒を出し、銃及工具を置いて河谷に下つて行く。間もなく釜の中で肉と野菜と馬鈴薯とが沸々として煮えつつある。彼等は之によつて満腹し無限の感謝をなしつつ、再び休憩し睡眠に入つた。

(323)

五 午後の戦闘

歩兵第三十五師團は最も苦戦を爲した。此師團は第三十六師團の左に在つて攻撃に任じたのであ

るが、スチルグベトネン附近で猛烈なる火網に引懸り前進が阻止せられた。露軍の砲火は此部分
が最も猛烈であつた。此敵に對し最も勇敢に奮戦したのはグラウデンツ聯隊及トールン聯隊の將
校等である。彼等は爲に多數戦死を遂げ兵の損害も亦大なるものがあつた。之が全軍に甚しく恐
慌を來たしめ、遂にロミンテ河の線でも其退却を喰ひ止めることが出来なかつた。四年半の後に
於て全軍を通じて最も優秀なる聯隊と稱せらるるに至れる此隊も、八月二十日の夕刻に於ては恐
慌の爲潰亂して逃走したのであつた。

此軍團右翼の状況は幾分良好であつた。該方面は敵を包圍するには至らなかつたが、戦況は必
ずしも危険ではなく、對等の勢ひで戦闘が續けられつつあつたが、該方面に在りし二箇聯隊も亦
退却運動を始めた。何故に然りしや、之は軍司令部から退却命令を下しロミンテの線に據るべき
を指示せられた爲めである。

第八軍司令部では第十七軍團の苦戦の報告に接し其急激なる情況の變化に一驚を喫した。蓋し
軍司令部では、午前及正午頃に至る戦況により既に自軍の勝利を信じ敵の退却に對する諸般の處
置を考究しつつあつたからである。

此日左翼に在りし第一軍團の戦況は初めは有利であつたが、午後に入り漸次面白からざる傾向

となり、軍團長は午後四時頃戦闘中止を命じた。併し此日の戦績を全般的に觀察するとき甚しく
不良なりとは謂ふを得ず、左翼方面は若干地歩を獲得し、俘虜四千、砲十門及多數の機關銃を鹵
獲した。故に第一軍團長としては翌日攻撃續行の意見を有したことは首肯される。軍司令官も騎
兵第一師團の情況を知り得たならば此攻勢意見に同意したであらう。

評 緒戦に潰走せる聯隊が戦争の末期に最優秀聯隊として活躍せるは皮肉の感がする。然し此
の如き例も他に澤山ある。一度失敗したからとて必ずしも其隊乃至個人を捨ててはならぬ、
之を訓戒し教育したならば其失敗を償うて餘りある戦功を現はすものである。軍司令部が樂
觀的氣持から急に思ひがけなき悲觀狀況に接する如き屢あることであるが、之が爲めに冷
靜沈著を失し易く、爲めに最善の處置を誤ることが稀れでない。指揮官たり幕僚たる者の覺
悟すべき重要事項である。

騎兵第一師團は大膽なる行動を以て遠く敵の背後に侵入し、ビルカルン南方で露軍の縦隊を
襲撃し一擧に五百名の俘虜を得、該露軍をして全然潰亂に陥らしめた。露軍の優勢なる騎兵軍
團(三師團半)は、八月十九日夕刻以來何處にか其影を没し去り、爲めに我が騎兵師團の行動を容
易ならしめた。然るに、通信の杜絶は第一軍團司令部及第八軍司令部をして騎兵の所在を知らざ

らしめ、殊に軍司令官は騎兵師團が全滅したものと信じ、延いて露軍が第八軍を殲滅せんが爲北方から猛烈なる包圍運動に着手したと判断するに至つた。吾人も軍司令官の此判断は必ずしも不當なりとは思はぬ。

評 通信連絡を缺けるとき赫々たる活動をなせる騎兵師團が殲滅せられたりとまで信ぜしむるに至る。其影響や甚大であり、延いて軍司令官の決心を左右するの一要因となつたことに想到するとき、餘りにも影響の大なるを感じない譯にはゆかぬ。

軍司令官をして戦敗を確信せしめ、最後の決心に餘儀なくさせた原因は、單に第十七軍團の戦敗、第一軍團の戦績のみでなく、豫備第一軍團の戦績も亦與つて有力なる原因となつた。依て軍團の模様を一應觀察するの要がある。

豫備第一軍團は午前十一時頃、其前衛をクレスツォーウエン及フリードリヒスベルグ附近に止めて休憩した。而して軍團長は休憩後、全速力を以て第十七軍團方面の砲聲に急進せんとした。然るに突如として右側ゴルダツプ方面から優勢な露軍が攻撃し來つた。獨逸騎兵が該方面に敵なきを報告したことは其任務を完了したのではない。軍團長も爲めに一時は驚いたことであらう。軍團縦隊は直に行軍路に休憩の姿勢から右側に展開した。クレスツォーウエン東南及ガヴァイテ

ン附近で猛烈なる戦鬪が惹起せられ、彼我一進一退、勝敗は直ちには決し難く、夕刻に至つても未だ決定的に進捗しては居らなかつた。然し漸次有利なる状況に進展し恐らく翌二十一日には決戦に導き得ると思はれた。又獨軍の爲めに有利なことがある、即ち日没頃更に南方より前進中の豫備第三師團はロガレン東方に到着し此處で翌日の攻撃を準備した。敵の背後はゴルダツプ湖及ゴルダツプ河がある。

右の状況を判断すれば、軍司令官としては自己の勝利を信ずればよいのである。然しブリットウキツ大將は一箇の人間に過ぎなかつた。第十七軍團の絶望的状況と軍司令部には最早豫備隊を有せざる心細き感じがするとき、南正面より重大なる情報頻々として到るとき、將軍たらずとも如何にして確信を懷き得べきや。蓋し南正面には第二十軍團を基幹とする一兵團を配置しあるも該方面の露軍は三軍團を算し近く迫りつつあつたのである。

以上の悲觀的情報は有利なる情報を打消して仕舞ひ、軍司令官は夕刻頃愈々ワイクセル河の西方に退却するの決心を爲した。軍參謀ホフマン中佐や參謀副長グリユート少將の退却否認具申も軍司令官を動かし得ずして一蹴し去られた。是れ軍參謀長フォンワルデルゼー少將が軍司令官の退却意見を支持したことも、軍司令官の意見を固めしめたことであらう。

評 八月二十日に於ける第八軍の戦況は、記事にもある如く、全般的には必ずしも悲観するの要なく、南方より戦機を發展せしめ得べき信念を持たなければならぬ。然るに第十七軍團の絶望的状況、第一軍團の停顿せる状況、騎兵第一師團の全滅感等が非常に悲観的に軍司令官の耳に響いたばかりでなく、自分は已に豫備隊を有せぬといふ心細さ等が更に悲観の念を増さしめたであらう。其上、南方の敵は豫想よりは優勢の兵力が迫りつつあるといふ、是れ亦不愉快を加ふる材料である。故に豫備第一軍團及豫備第三師團等の戦況が軍の全般を支配する如く有利には感じなかつたであらう。従つて退却に決したことは、同情的に觀察すれば無理ではないであらう。恐らく庸將ならずとも斯かる決心を取らぬとは言へぬ。然し吾人は斯の如き史的事實の多くあるに鑑み、苦境に在つて常に樂觀的材料の探求に努め、圖上戦術に於ける如き心境に心持ちを持ち直すことに修養を積むの肝要なるを想はなければならぬ。

午後九時第十七軍團司令部に與へたる訓令の要旨に依れば

状況は既に一變せり、敵の新兵力は北方に出現し我が騎兵第一師團の所在は不明なり。豫備第一軍團に對する露軍は新たに増加せられたる約一軍團にしてリック附近に在り。又露のナレフ軍は優勢なる兵力を以てオルテルスブルグ及ゾルダウに向ひ前進しつつあり。故に第八軍はワ

イクセル河後方に退却せざるべからず。

斯くて灰色の獨逸縱隊はロミンテ及アンゲラツプ兩河間の諸街道を背進した。時未だ真夜中にはならなかつた。軍歌も唱へず人聲もない。然し例によつて幾回となく停止した、が行軍速度は前進の際よりは速かであつた。特種の力に驅られて居る、恐怖の力であらう。太陽既に没し去りたる夜間の行軍に兵等を驅るものは恐怖である。

時として二縱隊も三縱隊も同一街道を行軍した。鞭に追はれて走る砲兵がある、歩兵の縱隊に突入して疾驅せんとするものがある、叫喚、混亂、何れもアンゲラツプ河の彼岸に競うた。ヨサク騎兵來襲するやも知れず、敵砲兵が尙砲火を斷續しつつある。休憩などする邊なし、四十八時間を行軍と戰場とに過ごしたる後なるにもかかはらず、彼等は只管行進を急いだ。然し露軍は追撃して來なかつた。

八月二十一日早朝擲弾兵第五聯隊は尙ほシュウエンテイシユケの傾斜地に在つた。是れ大隊は何等の命令をも受領せなかつたので、大隊の正面は敵方即ち東面して居つた。然るに夜が明るくや戦線は空しくなつて居る。そこで初めて大隊は退却に就いた。ところが期せずして第三十六師團の後衛となつた。露軍の追撃がなかつた爲、無事にアンゲラツプの防禦線に到着し得たのであ

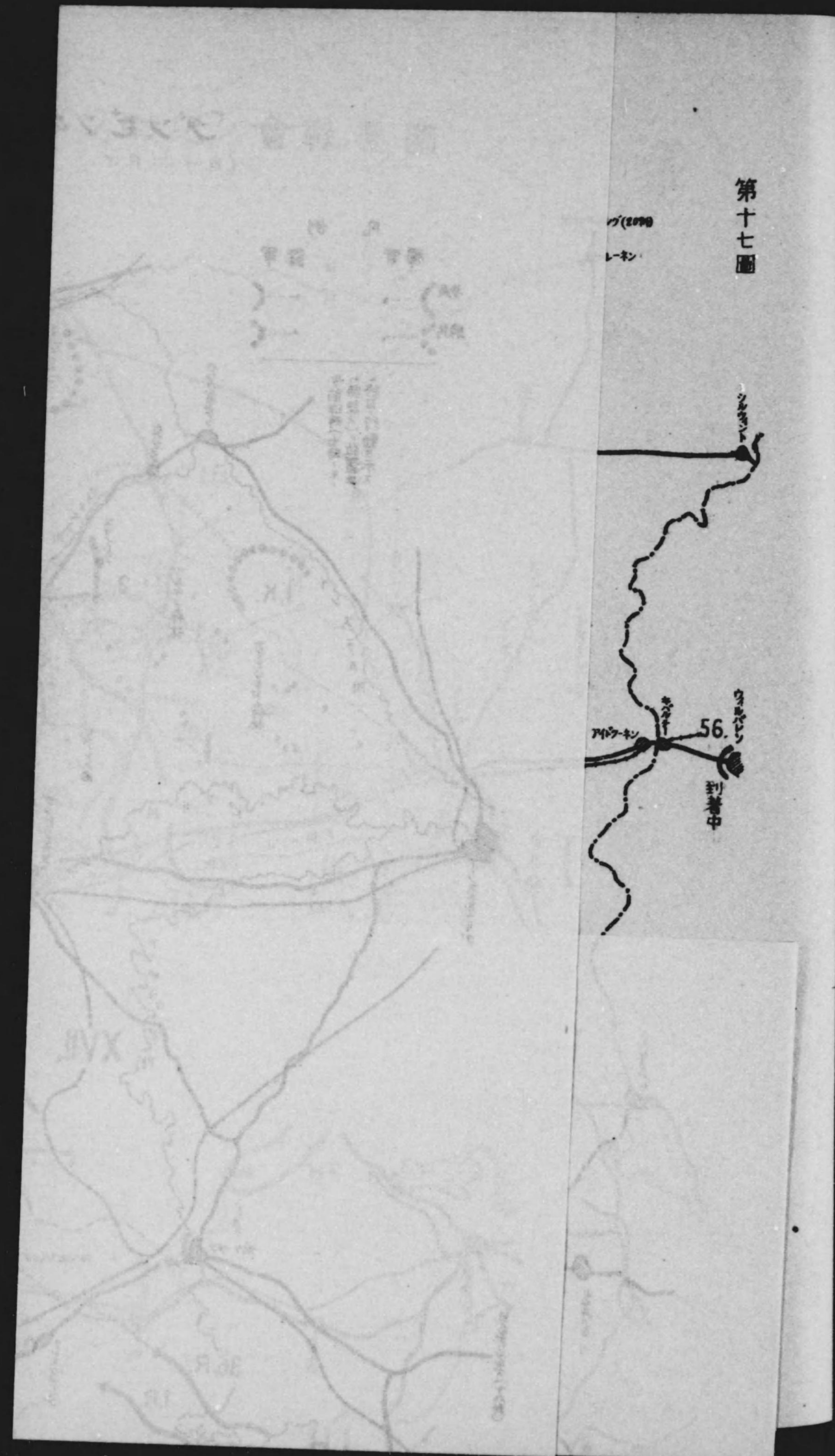
評 第十七軍團に與へたる訓令なるものは、恰も軍司令官が退却の理由を説明した様なもので、部下の志氣を阻喪させる様な文句である。こんなことは宜しくない。他に手段方法があるべきである。又退却の際に第二大隊が戦線に残された事なども倉卒の際有り勝ちではあるが、此種の過を犯さざる如く上下相互の注意を要する。

六 評 論

一 主として戦場心理の考察であるから、戦略、戦術上の評論を省き、軍隊指揮乃至統帥上の注意を要する心理的關係事項に就て總括的に評論を試みる。而も斷片的に小評を加へて置いたから、こゝでは概括的に止める。

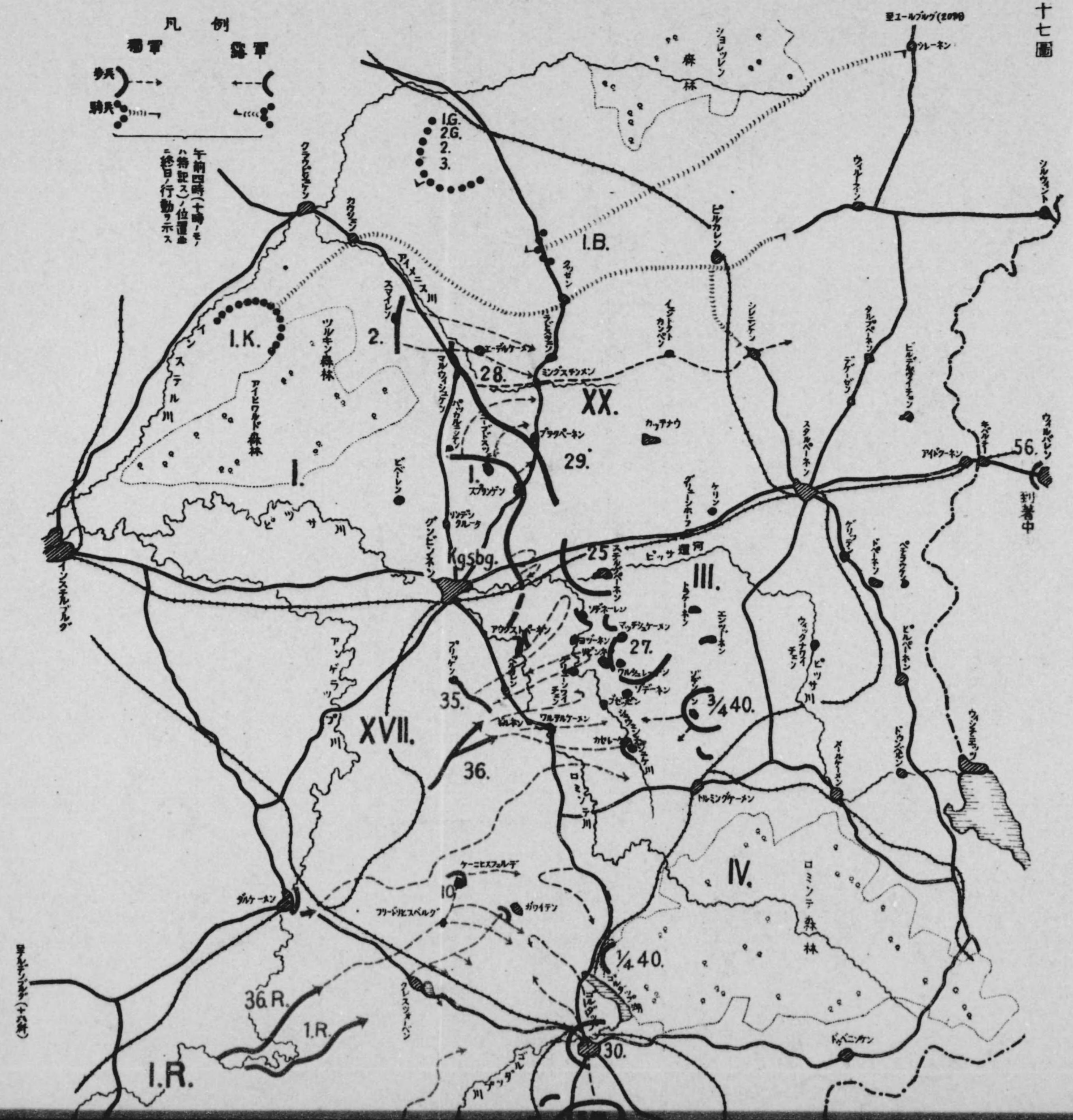
本記事は戦闘直前に於ける行軍、宿營及戦闘、退却等に就て大部隊より小部隊に至るまで其實狀が摘録せられてあり、實戰を経験せざる人々の爲めに参考となる。殊に大體に於て、事實を曲げず赤裸々に直筆したる點に於て價值が大きいと思ふ。而して概括的に吾人の腦裏に感ずることは、獨逸軍隊が、大戰前に於ては歐洲列強の軍隊中最も優秀であつたこと、即ち軍紀は嚴

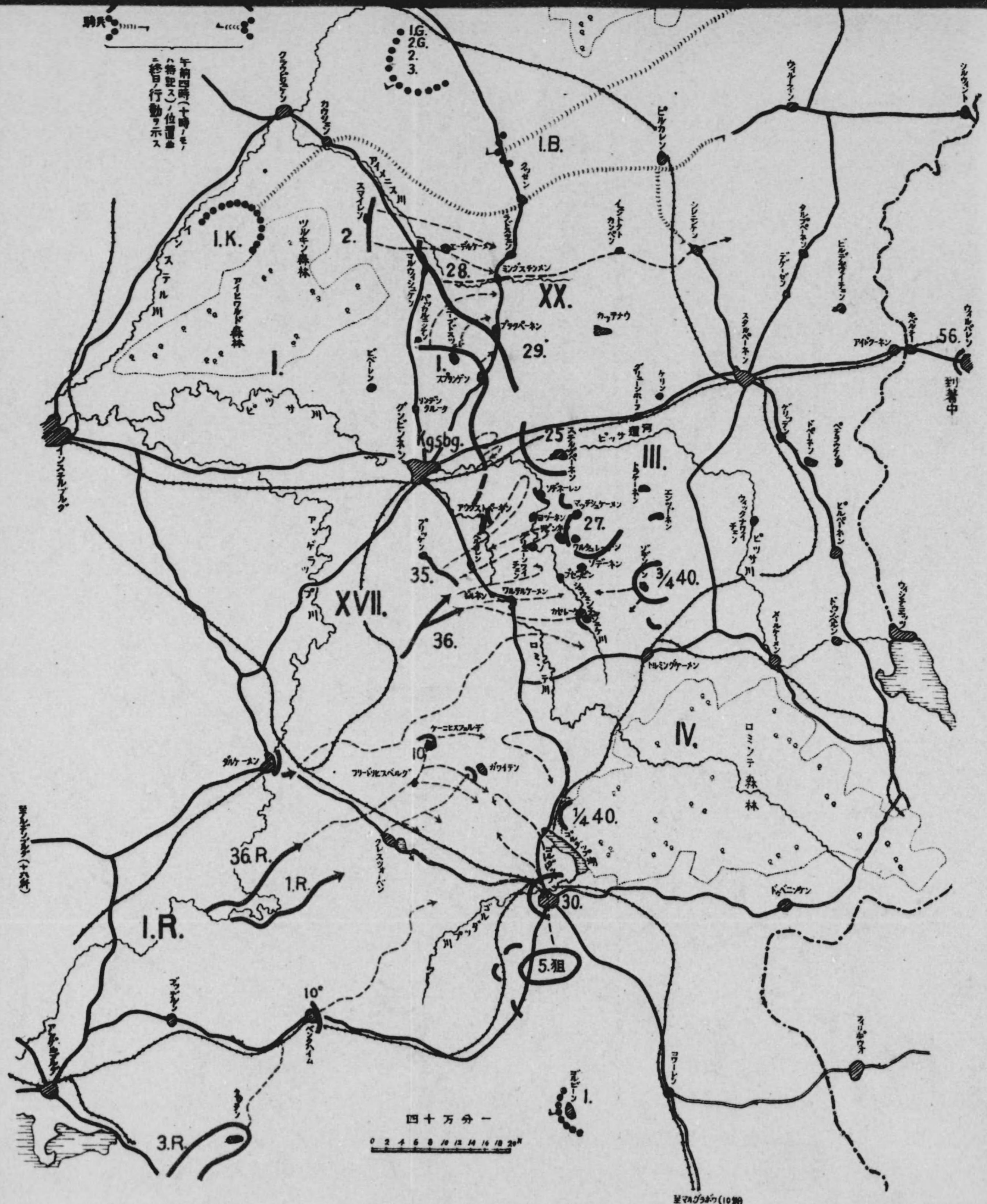
第十七圖



「ブンピンホン」附近ノ會戰要圖
(八月二十日)

第十七圖





午前四時十時
 午後三時十時
 行動を示す

四十万分之一
 0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20

1939年10月



肅で訓練は精到であるとされて居たものである、にも拘はらず其結果に於ける行軍軍紀、宿營軍紀が必ずしも嚴肅でない、戦闘中に勇敢ならざるもの少くない様に感ぜられることである。之を以て他軍を推して考へるとき更に其甚しきものがあるのであらうことを想像し得るのである。平素の演習と實戦とは自から異なるものあるは事實であり、又避け難きことである。唯其差を可及的小ならしむるを要する譯である。吾人は此間の消息に鑑み、平素に於て形の上に於ては十二分に訓練して習ひ性とならしむるに努むると共に、精神的教養に努力して已まざるを要する所以である。

二 兵等が第一線に於て夢中となり、精神的盲聾者となつた場合、何物をもわきまへず一目散に逃げ去ることが珍らしくない。之は決して外國軍の專賣と限つたものではない。かうなると上官の制止も、威望も既に效力を失ふものである。マッケンゼン將軍の如き獨逸軍中でも有名な鬼將軍で、グンビンネンでこそ不覺を取つたが爾後の戦闘就中突破戦には赫々たる功績を擧げて居る、既に本評論で研究せるゴルリツツ突破戦の如きも同將軍の實施した所である。此將軍や旅團長、聯隊長までが退却を阻止せんとして思ふ様にならなかつたのである。故に第一線に近き幹部即ち下級指揮官は特に第一線の掌握を確實にし、自己が戦死した後も次級者が確乎

として直に代つて部下を握り兵をして絶対に喪心せしめない様に心懸けねばならぬ。堤防は平素から充分に堅く且つ高く築設すべきである。軍隊も平素の修養訓練が必要である。愈々未曾有の洪水が起り危険の顧慮がある場合には、機を失せず之が應急補修をなし、徹宵警戒を怠つてはならぬ。戦闘に於ても情況危機に瀕する場合には之が潰亂に陥らざる前に應急の措置を講ぜねばならぬ。堤防が決潰したときは、洪水の治るまでは萬事休すである。軍隊が既に潰亂した場合は之が某地域と、某時間とを経たる後にあらざれば收拾すべからざるものである。

三 プリットウキツ軍司令官の境地如何

彼は午前中の戦況を有利に判断し得たるに拘はらず午後に入りて全然反対の判断に變化し、萬事悲觀的となり、不名譽なる境地に陥り、罷免の運命に遭つた。彼れ必ずしも怯者ではなかつたであらう。然し情況を悲觀的に觀察し始めると次から次へと悲觀的に流るるものである。曰く第十七軍團の敗戦、曰く騎兵師團の行方不明、曰く第一軍團の戦況停頓、曰く南方面の危急等々に依り、其實情を無意識的に一層悲觀するに至つた。即ち騎兵師團は恐らく全滅したるならん、南方面の敵の兵力は豫想より遙に優勢であり危機は目睫に迫れる如く感じ、當該方面指揮官の決意堅さにも拘はらず、之に信賴するの念薄く、豫備第一軍團の戦況も樂觀的に觀

察するの氣分が起らなかつた。斯くては到底退却の外途なきに至るは當然である。然し、此司令官の退却決心は聽てヒンデンブルグ、ルーデンドルフ將軍等をして殲滅戦を成功せしむるの導因をなした。結果から言へば却て良好の美果を結んだのであつた。是に於てプリットウキツに對し同情的に觀れば、實に運命が然らしめた所であるとも言へよう。唯吾人は其心理的考察に於て「斯の如き至難なる苦境に處して常に光明を見出す如く心氣を堅持し、以て其難關を突破するの手段方法を發見するに至らんことを期せねばならぬ」と言ふ教訓を銘肝すべきである。

(終)

昭和十二年七月五日印刷
昭和十二年七月十日發行

戰史評論與附

定價金貳圓五拾錢

編輯發行者

東京市麴町區下六番町十七番地

前田岩太郎

印刷所

東京市麴町區土手三番町二十九番地

干城堂出版部印刷所

發行所

東京市麴町區下六番町十七番地

干城堂

電話九段二八七七番
振替口座東京一六九八五番

大取次所

東京・日本橋・通三丁目

武揚堂書店

電話日本橋(24)二四五一番
振替口座東京四六四一七番

編著述者名	書名	概説	定價	送料
陸軍技術本部	軍事と技術(月刊)	一方に於ては部内軍事技術の向上を圖り一方には廣く部外と智識を交換し軍民工業の提携にも貢獻せんとする最も有益なる雜誌である時局に對する認識ある士は一讀を要する	三〇	〇
兵學研究會	兵學研究會記事(月刊)	斯界の最高權威者によりて行はるゝ圖上戰術並戰術の原則又は戰史等の研究を主とし併せて各種の文獻中より必要有益なるものを採萃紹介する各級將校必讀の高級雜誌である	三〇	〇
陸軍大學校幹事	陸軍大學校課外講演集	日露戰役に於ける壯烈悲壯なる實戰談又は帷幄に參畫した幕僚の苦衷談、遠く戰場外で活動して國軍に援助を與へた士の經歷談並著ある學者の所論を集めたものである	各一・四〇	二五
陸軍大學校兵學教官 陸軍砲兵中佐 菰田康一	昭和五年陸軍大學校滿鮮戰史旅行講話集	旅順、南山、得利寺、首山堡、遼陽、沙河、奉天、本溪湖等の戰蹟に於て歴戰者の行はれた講話其他要路の士に依つて行はれた滿鮮に就ての有益なる講演を集めたものである	二・八〇	三七
兵學研究會編	最新白紙戰術 第一卷(遭遇戰迄)	戰術の原則を概ね綱要の順を逐うて或は圖表解的に或は之に記述を加へて一目瞭然理解極めて容易なる如く解説し特に重要な事項は問答の形式を以て徹底的に研究せしもの	九三	三
兵學研究會編	再審試驗の準備 第一卷(地形及交通の部)	要するに補助學を深刻に研究しようとする士の參考書であつて本書を一讀すれば如何に氣を著けて研究すべきかといふことが判るのであるから一般將校の一讀を希望して已まない	八三	三
兵學研究會編	現地的戰術の研究	比較的單純明瞭なる狀況より漸次判斷困難なる狀況に及び其間與へられたる問題五十の適切な之に對する研究の周到なる眞に模範戰術書として推奨せらるべきものと信ずる	一・五〇	一八

東京市麹町區六下番一七
電話九三三(33)段
電報掛東京一六九八七番
電報掛東京一六九八七番

發行所 前田干城堂

編著述者名	書名	概説	定價送料
兵學研究會編	初級戰術の研究 <small>戰術叢書第二卷</small>	眞面目に必勝の信念を有し得る策案を講究しようといふ眞摯なる態度を以て初級戰術の全部に就て研究を続けられたもので有ゆる研究事項を網羅した初級戰術研究上無二の参考書	一・八〇 八
兵學研究會編	應用戰術の研究 <small>戰術叢書第三卷</small>	一通り初級戰術を會得せられた篤學者の爲應用戰術を紹介しようとしたもので想定の重なるに從ひ情況も漸く複雑となり判斷困難なる代りに興味も多く研究深刻著眼非凡である	一・八〇 三
兵學研究會編	交通戰術の研究 <small>戰術叢書第四卷</small>	河川、通信、鐵道に就て詳細に講述せられあるのみならず或は戰例を紹介し或は圖上の研究に依り鐵道作戰の一部を紹介する等周到なる講述であるから陸大準備其他に最も適當す	一・八〇 八
兵學研究會編	陣中要務令詳解 <small>大正五年八月改訂 (全八冊) 第一、七、八巻品切</small>	改正の根本義に精通し且多年高等帥兵術の教育に經驗ある著者が獨り條文のみならず是が基礎たる戰史例證を引用し其他本令に關係ある諸原則、應用例等は殆ど細釋講述せるもの	一・八〇 八
陸軍大學校兵學教官 陸軍砲兵中佐 菟田康一講述	陣地戰ノ研究 <small>(全二冊)</small>	陸大に於て四年に互り心血を盡いで講授せられた戰術の筆記であつて陣地戰と稱するも固より特別なものではなく要するに原則を詳述せる完全戰法の研究書である	各 二・〇〇 三
陸軍大學校兵學教官 陸軍歩兵少佐 村上啓作編述	戰爭要論	『戰爭其物』に對する學理的國家の戰爭諸行動の攻守等専ら戰争自體に就て研鑽せられたもので大戰争學とも稱すべく各兵將校は必ず一讀せらるゝ要ある参考書である	三・〇〇 三
陸軍大學校幹事 陸軍少將 多門二郎著	軍及師團ノ戰場統帥	多年陸大教官及幹事としての蘊蓄經驗を傾注して參謀演習旅行合同班を指導せられた際の記事であつて讀者をして容易に軍統帥の一斑と聯合作戰の要旨とを窺知せしむる良戰術書	三・〇〇 三

東京市麹町區下六番十一番 前田干城堂發行
電話九三三(33) 電報掛五八六一

編著述者名	書名	概説	定價送料
陸軍歩兵學校教育部長 陸軍少將 筒井正雄	歩兵部隊長ノ戰鬪指揮 <small>練近戰ニ於ケル</small>	歩校教官を專習員として施行せられたる現地戰術記事を要約し特に練近戰の實相を説述して之が對策を討究し、歩、砲、飛の協同運用に關し見解を披瀝せられたもので現代戰術研鑽の爲一の指針を與へられたるものである	〇・九〇 三
騎兵監部部員 陸軍騎兵大佐 森壽	圖上戰術(大兵團ノ運用)	大正十二年の講述なるも、軍の會戰計畫より兵站、輜重に至るまでを原則的に説述しあること新刊と申ならぬ	〇・九〇 九
陸軍騎兵學校長 陸軍少將 森壽	現地戰術	多年陸大教官たり且騎兵教育界の權威者たる著者が騎校職員の爲に實施せられた戰術の記事であつて戰術の研究のみならず教育及統裁法研究の一助としても價値大なるものがある	一・二〇 八
兵學研究會編	決心ト判斷 <small>(全三冊)</small>	多年高等帥兵術の教育に従事せる著者が少數の地圖を巧に利用し想定を更むること數十回沿く各種の情況を示して決心及判斷を求め縱横無盡に之を論評討究せられたるものである	各 〇・九〇 九
兵學研究會編	圖上ノ研究 <small>戰術要綱</small>	戰術要綱制定の本旨に精通せる數氏に依り圖上の研究を行ひ一々條文と對照して説明し或は其編纂の趣旨を紹介する等専ら綱要制定の主義精神の究明に努めたる良參考書	一・八〇 八
陸軍大學校兵學教官 陸軍航空兵大佐 寶藏寺久雄著	歐洲旅行記	行く先々で例の輕妙なる行文と偏せざる著眼とを以て孤獨の旅の見聞を百六十餘の寫眞を入れて赤裸々に記述せられたもので面白い中にも教訓を含まれて興味且利益多き讀物	一・五〇 三
陸軍大學校 將校集會所編纂	廣瀨中將の面影	閣下が生前自ら記録し置かれたる流暢達意の自叙傳及無飾眞實の實戰史と關係深かりし各位の記事せられた切々思慕の遺聞とを輯録したもので最も有益なる修養文獻たるを失はぬ	一・八〇 三

東京市麹町區下六番十一番 前田干城堂發行
電話九三三(33) 電報掛五八六一

編著述者名	書名	概説	定價送料
獨逸國防省出版 陸軍大學校譯	軍隊指揮	大戦直後出版せられた聯合兵種の指揮及戦闘に根柢的改訂を加へたもので獨逸新軍が其有する豊富な経験と將來戦に對する眞剣な研究とを表白する戦術研究上最も有益なる参考書	八九
陸軍砲兵中佐 松井光太郎著	鐵及鋼	著者が其熱烈なる研究心に依り諸教科書、參考書に渉獵し専門家の教を受け實地の研究を果ねた所を輯録せられたもので記述平易にして而も廣く關係事項を網羅した良参考書	二五〇三
兵學研究會編	世界大戰史講義錄 (全二册)	博學克く大戰の史實を窮め明哲克く之を批判し得る著者が簡明適切に戰役經過の概要と其間に於ける大小の教訓とを紹述せしもので我兵學界稀に見るの良参考書であると信ずる	二〇〇八
陸軍教授 三輪徳三講述	西洋近世史	軍人には箱略以外別に史的素養を要するの見地より我軍部に於ける必要に應ずる爲陸軍教授として多年の経験ある著者を煩はして講述せしもので概ね高等學校程度である	二五〇八
陸軍教授 三輪徳三講述	東洋史	西洋近世史の姉妹篇であつて筆を今古史に起し現代に至る迄の興隆衰替を詳述し殊に日本興隆時代に於ける記述頗る剴切では非一讀の要あるものとして推奨する	二〇〇八
兵學研究會編	歐洲小戰史	東普會戰に於ける第一軍團の行動を記述せる同軍團長の回想録を平易に翻譯し之に所見を附したものであるから小軍の行動を具體的に研究し且歐洲戰の一部を詳細に知るに適する	一〇〇三
文部省譯 陸軍大學教授 岡田哲藏註解	勅諭英譯	文部省に於て特に委員を設けて譯出せられた軍人に賜はりし勅諭の英譯に對して更に岡田教授の註解を附したるものであるから英語學者の一讀を希望する	一〇〇三

發行所 前田干城堂
東京市麹町區六番一七
電話九三三(33)
電報掛 八一七七八
一六九八五番

編著述者名	書名	概説	定價送料
兵學研究會編	兵學雜俎	某大家が自ら研究せられた所を紹述せられたもので名將の戰爭指導法、クラウゼウキツ著大戦學理の梗概、フオッシュニ元帥の研究指針、孫子の大意等悉く有益なるものばかりである	九五九
兵學研究會編	此頃の飛行機	飛行機の現出は國防の方式を一變せしめたのみならず郵便に旅客輸送に二十年前には夢想だせなかつた奇蹟を實現したその飛行機の現況は一體何んなものであらうかを説く	九五九
獨逸國陸軍少將 バール著 陸軍大學校教授 司馬亨太郎譯	巴爾克戰術書 (全十八册)	大戦前世界の名著の評ありし本書は戦後に於ける戰術推移の根基を研究するの資料として今尙大なる價值を有するを以て文庫等の備附用として價値極めて大なるものがある	各 八八
陸軍大學校兵學教官 陸軍歩兵中佐 金谷範三講述	普奧戰史講義錄	陸軍大學校に於て講義せられたものであるから其所論適切、引用精確、事理明晰にして戰史研究上最良の参考書であることは之を述ぶるまでもあるまい	八三
陸軍大學校譯 普國 參謀本部戰史部發行 「フオン・クラウゼツ キツツ」起草	普國大敗記事	兵學に就て非凡の資質を有せる著者が當時の文武兩局面を遠觀せる愛國的の見地より一八〇六年戰役の事實を忌憚なく直言したものであつて戰史研究上極めて有益のものである	五三
陸軍歩兵中佐 櫻井富次著	學校教練の體驗	著者が諸條規及上司の訓示口演を服膺し孜孜として勉められた體驗の手記であるから實に學校配屬將校の爲の羅針盤たるのみならず一般將校の爲にも參考たるものである	八三
米國陸軍航空次長 ウイリヤム・ミツチ エル著 兵學研究會譯	空中國防論	空軍指揮官として躬ら親しく歐洲大戰に従ひ戦後航空次長の要職に在りし著者が所論の行はれざる爲を以て天下に訴へたる一大獅子吼であつて著者の理想を窺知するに適する	一五〇三

發行所 前田干城堂
東京市麹町區六番一七
電話九三三(33)
電報掛 八一七七八
一六九八五番

編著述者名	書名	概説	定價	送料
陸軍騎兵學校編纂	三十一年式機關銃 參考書	騎兵學校に於て教育用として編纂せられたもので兩銃の構造、機能、分解、結合、手入れ、格納より駄馬具に至る一切に就き詳細に説明せられた頗る有益なる参考書である	空	三
陸軍騎兵學校	昭和七年 騎兵佐官召集記事 (全三冊)	第一巻は騎兵教育の爲、第二巻は現代騎兵戦術の趨向を知る爲、第三巻は上二者を補足する爲の最良書である	各	九
陸軍騎兵學校	自昭和二年一月至同年三月 騎兵佐官召集記事 (全三冊)	同上戦術には大兵團の運用、現地戦術には騎兵旅團以下の動作を、其他射撃通信等に就ても近時の趨勢を説明しありて騎兵戦術研究並教育上の良参考書である	各	九
陸軍騎兵學校	騎兵操典研究ノ參考	操典の改正要點中特に研究を要するもの及新に増補せられたる事項に就き細部の事項に至るまで詳細に研究蒐集せられたもので操典研究は勿論騎兵教練實施上無二の参考書である	八	六
陸軍騎兵學校教官編纂	赤軍騎兵操典 第二部第一篇	總則、通則より軍刀中隊、機關銃隊、聯隊の戰闘に至るまでの記述で赤軍騎兵の編成、裝備、教育上の着眼、戰闘法等を知り隣邦軍の戦法を實際的に研究するに適する	八	六
陸軍少將 小嶋時久著	輜重兵戰術とは	著者が多年立案せる諸想定を基礎とし一般戦術書戰史演習等の實際より材料を蒐集し之を整理分類して一つの體系を成せるもので苟も行李輜重に關する事項は悉く網羅してある	一・八〇	二
陸軍少將 小嶋時久著	續輜重兵戰術とは	前篇に続き主として輜重兵戰術の體系を論じたもので一般戦術と輜重戰術、高級指揮官の輜重運用と輜重指揮官の部隊指揮も本書に依りて明瞭となつたものといふべきである	一・五〇	三

發行所 前田干城堂 東京市麹町區下六番一七
電話九三三(33) 電報掛九二七
東京市九段一(33) 電話二七七八
東京市九段一(33) 電話二七七八

編著述者名	書名	概説	定價	送料
陸軍大學校兵學教官 陸軍輜重兵中佐 佐々木吉良講述	輜重勤務講授録	軍、師團、騎兵旅團の行李、輜重の裝備、制置各種の場合に於ける勤務に關し原則を詳述し次で圖上で具體的に研究せられたものである	二・八〇	三
陸軍野戰砲兵學校 將校集會所出版	野戰砲兵觀測通信 之研究	砲兵觀測通信教範草案は其理解容易なりとなし、そこで今日迄の研究を整理し教範の章節に従ひ努めて平易に逐條懇切なる解説を加へ其理解に便せんとしたのが本書である	八	九
陸軍技術本部編纂 砲兵大佐工學博士 多田禮吉講述	砲兵の情報及射擊要具	工科學校召集佐官の爲斯界の最高權威者の講述せられたものなるを以て記述の劃切であることは言ふまでもない獨り砲兵科のみならず各兵科將校必讀の参考書である	一・〇〇	九
陸軍砲兵中佐 和田 盈講述	砲兵戰術講授録	多年野砲校教官の要職に在りし著者が其多年の経験と豊富なる蘊蓄とを傾注して簡潔、劃切に講述せられたものであるから各兵科將校砲兵戰術研究の良参考書である	一・五〇	三
陸軍技術本部編纂 八木録郎著	密位三角函數表	ポケットに携帯して各兵の觀測及測量諸元の計算、彈道及射擊諸元の計算、各種三角函數を含む公式の計算、角度と密位との換算、其他地形測量に使用し得る便益大なるもの	一・八〇	六
陸軍砲兵大佐 八木録郎著	毒瓦斯とは	斯界の權威者八木大佐が空襲下に暴露された我が國民をして瓦斯防護を研究し以て明日の準備を完からしめようとなされたもので鮮明なる寫眞版が懇切なる説明に花を添へて居る	五	六
陸軍科學研究所編纂	市民ガス防護必携 附燒夷彈の防火法	多年の研究及經驗の結果を最も平易に記述せられたもので一般市民の防護に關する研究資料として眞に唯一無二のものである殊に防護關係の各位は先づ一讀せられる要がある	二〇	一

發行所 前田干城堂 東京市麹町區下六番一七
電話九三三(33) 電報掛九二七
東京市九段一(33) 電話二七七八
東京市九段一(33) 電話二七七八

2-3498

編著述者名	書名	概説	定價	送料
陸軍大學教授 岡田哲藏 編著	世界大戰の英詩	英詩は最近大に興隆し殊に世界大戰に關するものに於て名あり其中より代表的のもの三十餘篇を選び原詩と翻譯を對照し之を評釋せるもので有益なる英文研究資料である	五〇	六
陸軍大學教授 宮島吉敏 講述	支那語語法	多年の經驗に依り實用を主眼として講説せられたもので、其分類の適切にして解説の精細なること既出文法書中殆んど其類を見ざるものである	二・五〇	一五
兵學研究會編	陸軍大學校學生候補者初審試驗問答解 (大正四年以降昭和七年迄毎年一册發行)	全科目につき模範的答解を示したるは勿論答案作爲の爲必要なる準備の説明、答解作爲法及作爲上の注意等を併せ示したるものなるを以て陸大志望者の無二の参考書である	各八五	九
外國語學研究會	外國語學高等試驗 初審試驗問題解答 (英、佛、獨、露、支那の五册に別つ)	外國語學研究會に於て自大正七年至大正十一年の問題に就き十分なる研究を重ね模範答解として發表せるもので高等試驗候補者は勿論一般語學研究者の爲有益なる参考書である	各五〇	三
兵學研究會編	圖解戰鬪動作 (全八册)	典・令・範に示された各種の戰鬪動作を繪解きにして一目瞭然直に理解出來、はつきりと頭に這入るやうにした教育用資料である	各二〇	三
帝國大學講師 張延彦 共編 陸軍大學教授 宮島吉敏	支那語 動字分類編 (全十六册)	支那語舊版動字分類大全一書を改訂せるもので精神部、身體部、人事部、物理部の四部に大別し更に各部を各四に小分し句數總計千五百餘を收めたものである	各一五	三
兵學研究會編	戰史評論第一卷	斯界の最高權威者が古今を論せず東西を問はず廣く各戰役に互り取材を選び斷片的に説述と評論とを試み且教訓を捕捉することに努められたる戰史研究上最も有益なる参考書	二五〇	一五

東京市東區下町六番一七
電話九三三(33)
電報掛九八七
東京市東區下町六番一七

發行所 前田干城堂



